ていく日本画のありようを提示しようとしているように見える。

いわずもがなの昔語りではあるが、「日本画」という言葉は、やまと絵や狩野派といった流派を糾合し、「西洋画」と対となる用語として誕生した。その端緒は明治15年（1882年）にフェノロサの講演「美術真説」を翻訳したさいの造語であったというから、実に142年前である。つまり、何か積極的な－「線」や「余白の美」、「装飾性」などという特徴があるから「日本画」と規定されたわけではない。しかも「日本」という国名を背負い筆を執って国に報いるという近代の宿命から、敗戦を経た現代の「日本画」へと経過すれば、おのずとその性格は変質していくべきものである。これまで、美術雑誌のアンケートなどで評論家が「過去の日本画をどう思うか」とか「あなたは日本画家ですか」と問うて、困惑したり反駁している誌面を目にしてきたが、つながっていないし個々の表現のなかで岩絵具を使いたいという作家には当たり前の反応なわけである。

本展タイトルで謳うのは、「日本画」のあいだにピリオドをうつかたちでの、過去との断絶の示唆である。いっこうに市民権を得ていない（ように見える）「膠彩画」でも、「日本の絵画」でもなく「日本・画」である。個々の作家が自らの立ち位置で墨や岩絵具、あるいは水溶性の画材、膠の代替えであるアートグルーを用いて現代人の眼で描く「日本・画」なのだ。

これまで、「日本画」を解体し、別の概念－ここでは「日本・画」であるが－へと抜本的に改編する提言はこれまでなされてこなかったことであるし、この小さな中黒が表す意味の深さを考えるにつけ、ほかならぬ桐生という土地柄にあって大川美術館が展覧会タイトルとして命名したことに快哉なのである。かつて「西洋画」の対として、しかも翻訳された言葉として生まれた「日本画」。本展第一部と第三部の連関と相違、実際に制作する側の意識へと考えを巡らせるとき、この「日本・画」は、今後の美術史を編むうえでも画期となる概念というべきなのである。

（平塚市美術館 館長代理）

第一部　近代の「日本画」 ― 四季の彩り

第一部 展示風景

第二部　桐生の日本画家たち

奥村稔 展示風景

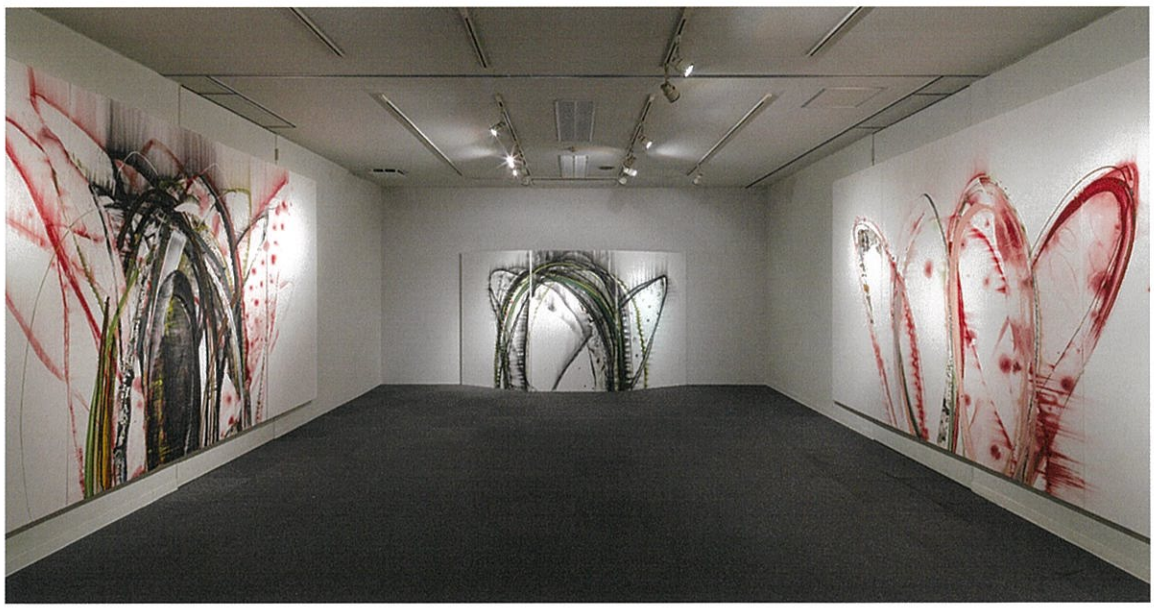
藤谷雅春、藤谷和春 展示風景

石井としかつ 展示風景

第三部　日本・画 ―視覚・様式・技法

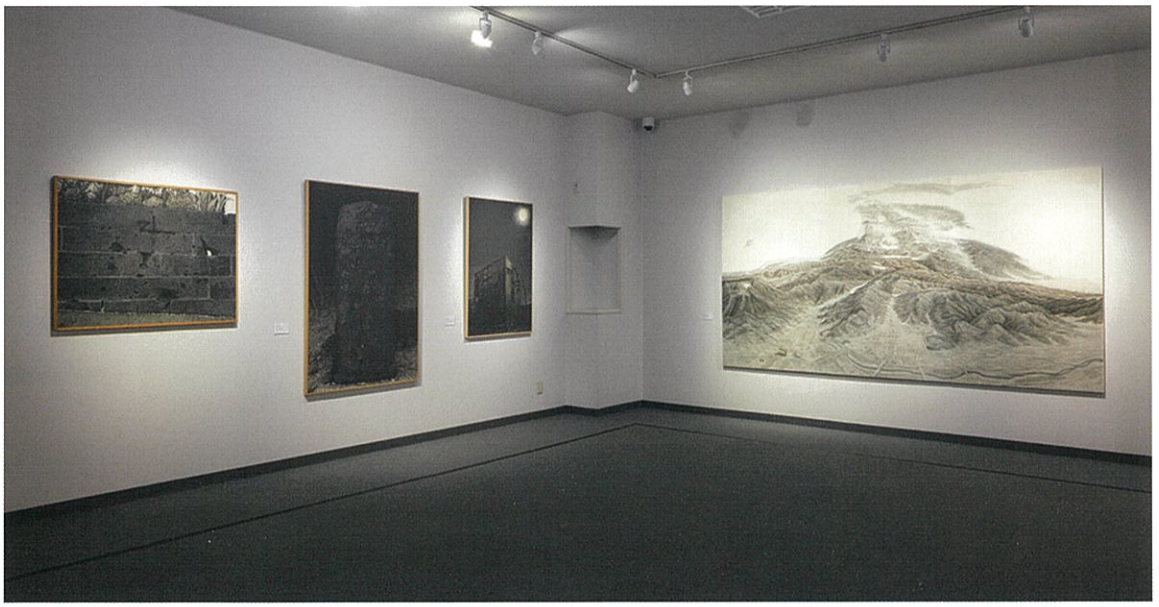
堀江栞 展示風景

小野友三 展示風景



菊地武彦 展示風景

山口晃 展示風景



金原寿浩 展示風景

編集
発行　公益財団法人　大川美術館　〒376-0043　桐生市小曽根町3-69
TEL 0277-46-3300
FAX 0277-46-3350
URL.http://www.okawamuseum.jp